

(キツテのキ) ユ(ユウビンのユ) メ(メジロのメ) ミ(ミカ
ンのミ) シ(シンブンのシ) キ(キドのキ) ヒ(ヒコーキのヒ)
モ(モミジのモ) セ(セカイのセ) ス(スズメのス)

というのである。私の名前を電文で送るとすれば「ヤマトのヤ、マツチのマ、ナゴヤのナ、カワセのカ、マツチのマ、サクラのサ、ツルカメのツ」というふうに発信するのである。これが業務関係の電報の送受信の科目の一つなのだ。

思い出の一つに加えるに裁判所の見学がある。今でいえば社会科の勉強というところだろう。当時は課外授業とでも言ったのだろうか。担任の齋藤倫治教官に引率されて、仙台地方裁判所へと向った。

大通りに面して厳めしい石の門に、仙台高等裁判所と仙台地方裁判所の二つの銅板の表札が埋め込まれていたように記憶している。門を歩いてレンガ造りの古風な重々しい雰囲気建物で、薄暗い廊下を通過して法廷へ入って行き、傍聴席の木の長椅子の上に座った。誰もが咳一つ、囁きもなく重苦しい空気にじっと耐えているようだ。

齋藤教官は、静かに振り返って、「みんな、正面の裁判長席の後ろの壁を見てみなさい。秤の絵が見えるでしょう。裁判は公平無私というのを表わしているのだよ。」こう言ったのが今でも頭の中に刻み込まれている。(注IIはかり(秤)は重さを測る装置の総称、中国では権衡という。権はおもり、衡はてんびんである。英語ではバランス。わが国では『新撰姓氏録』に波賀里という最初の記録がある。崇峻天皇のころ、中国から上毛野久比が伝えたものと伝えられている。『世界原色百科事典より』) 最初に廷丁(廷吏)が入り、次に弁護士等関係者が入って来て机の上で書類を広げている。間もなく裁判官席の後のドアが開き、裁判長と裁

判官が入廷、すかさず「起立っ。」という声がして、法廷内の全員が立って、「礼っ。」との合図で一斉に裁判官に向って頭を下げた。

この裁判は、民事事件でなく刑事事件であった。(当時は何の裁判か分からず唯傍聴していた)被告席に、浅葱色の着物を着た囚人が立っていた。何時入って来ていたのか気がつかなかった。裁判の内容も何が話され、どう進行したのか忘れてしまったが、その日の裁判が終り、その囚人が出て行く時の姿をハッキリ覚えていた。頭に烏追笠のような、もっと深く顔半分も隠れるくらいの編み笠をかぶせられ、両手は前で合掌の形で縛られ、腰に腰縄が結ばれ、獄卒(?)が後からその縄を握り、更に両脇に付き警護してゆく様子は、余程の重罪人なのだろうと思った。

僅か三ヵ月の間にいろいろな勉強をさせてもらった。休日に、街に出ることもなく、八木山の緑いっぱいの道を散策する時、戦時中である事も忘れ、気分が爽快になる。しかし、溪谷に架かる吊り橋から谷川を見ると川岸に小屋掛けが見られ、そこで燃料にする亜炭が掘られているのだと聞けば、石炭や石油の不足がこんな発熱量の少ない物まで使用しなければならぬ逼迫した時代が感じられた。また、誰から聞いたのか忘れたが、この谷川の川底から掘り上げられた埋木を乾燥加工したのが仙台名産土産品の埋木細工だという。

仙台に来ていたのだから松島ぐらいいは見て置こう。それに松島には瑞巖寺という伊達家のお寺もあると聞く。後学のため拝観して語り草にしようと同室の高橋君と二人で見物に出かけた。

七月も半ばで暑い日だった。七月末には修業期間も終って帰郷することになっていたので、懐具合も淋しくなっていたが、松島までの往復の電車賃とそば代位は財布の中に入れて出発した。途中高橋君は「今度はと云ったら、高橋君は、「いいよ、喰いよ。」私は黙って受取った。醤油で程よく味付けされたささえのうまさ、世の中いはこんな美味なものを食ってる人も居るのか、と思った。私は値段を聞かなかった。高橋君には大きな借りができたと思った。

七月も末近くなり、あと何日かで学業も修了するというある日、八木橋君は、「山ちゃんや、女子寮のあるところ知ってるか、ちょっと近くまで行ってみないか。」と誘うので、仙台も今度何時来れるかわからない、見れるところは何んでも見て置こうと思いい八木橋君について行った。校内で、体操の時間でもあるのか、白シャツにモンペ姿で鉢巻をし、「オイチニ、オイチニ」と黄色い声を張り上げながら走り回っているのを見たことはあるが、女子寮は何処にあるかは知らなかった。

清明寮から歩いて十分ほど、愛后橋の近くだったと思う。八木橋君は指さして、「あそこが、そうだ。隣村の常盤から来る娘が居るのだ。電信科で級長をしているのだから。」道路端から板塀に囲まれた木造の建物を覗いて見ていると、まるで示し合せたかのように、玄関から洗濯物を抱えた女の子が出て来た。「あれだ。あの娘が常盤から来たわらした。」八木橋君は「ヒュー」と口笛を鳴らした。体格のいい大柄なその娘は、私たちに気がついて、ちょっと頭を下げてただけで何事もなかったように物干竿の方へ歩いて行った。たったそれだけである。

戦時体制で男女の交際は特に厳しい時代であった。『男女七歳にして席を同じくすべからず』まるで、男と女が二人だけで話をしていただけでも世の人たちは「不義不倫」をしていると見るような非常時の時代である。

八木橋君は、密かに別れを告げに来たのかも知れない。たったそれだ

減多に來れないから塩釜神社へ寄って、塩釜から船で松島へ行こう。」と提案してきた。私も船にも乗ってみたいと思っていたのですぐ賛成してそのコースを行くことになった。

記憶が定かでないが、塩釜神社は建造物そのものが朱に塗られ、玉垣も鳥居もみな朱一色だったように覚えている。大きな錨と捕鯨用の銚が外に置かれてあったような気がする。

祭神は塩土老翁神(しおつちのおじのかみ)・経津主神(ふつぬしのかみ)・武甕槌神(たけみかづちのかみ)。航海・安産の守護神として信仰され、陸奥国一の宮である。(大辞泉より)

塩釜港から遊覧船だったのか定期船だったのか、青い海の松の生えた島々を右に左に見ながら一時間ぐらいいもかかって松島海岸へ着いた。先ず瑞巖寺へ参詣、ここでも驚いた。お寺といえば、村の庵寺か、金木か飯詰の寺より知らない田舎出の若者には瑞巖寺は寺というよりお城のように見えたのだ。

もう一つ松島では忘れられない思い出がある。戦時中であつたが、国民服に戦闘帽、モンペ姿の観光客、それに軍人等で結構人出は多かった。土産物も絵はがきや玩具の鉄砲・刀・お盆に埋木細工等が主なもので喰べ物は一切なかった。五大堂へ向う途中、たまらない良い匂いが鼻に入ってくる。高橋君が「おい、ささえの壺焼きだ。喰べてゆこう。」と私の袖を引っ張ったが、私は、「うーん。」と生返事をした。予定外に船に乗ったりしたので小遣い銭が乏しいのだ。帰りの電車賃ぎりぎり、とても高価な(いくらかだったと思いい出せないが、兎に角高かった)ささえを口にするにはできなかつたのだ。高橋君は、走って行って竹の皮に包んだささえの壺焼きを二個買ってきて私に一個差しつけた。私は「実は」

けで満足げに、「さあ帰ろう。」と言って後も振り返らず先に立って歩いてゆく。私は後を振り返って見ると、その娘は物干竿の下に立ってじっと見送っていた。

私たちの卒業の一週間ほど前だったろうか、寮に多数の布団袋が配達され、新入生が入寮して来た。

青森県からは何処の町村から来ているのだろうかと思ひ、先輩面して渡り廊下を通り別棟の新入生が入った寮へ行き、「青森県から来てる者は居ないか」と廊下を大声を出しながら歩いていると、或る部屋から、「ハイッ」と顔を出したのは精悍な顔つき色の浅黒い少年であった。「お前、何処だ。」「五所川原です。」「オレは嘉瀬だッ。」その後の会話は忘れてしまったが、この新入生は旧松島村出身で毛内嘉代秋君（現青森県議会議員、元副議長）であった。

修了式の二三日前に私は齋藤教官と呼ばれた。教官室へ入ってゆくと、「君に一つ言って置きたい事がある。講習所の修了生は局報（仙台通信局報）に名前が載るんだ。その時優等生には◎がつくんだが、今回の修了生は三十二名で人数が少ないので優等生の枠が二人より少ないのだ。僕は頑張ってみたが、前例がないということで他の教官達の了解を得られなかった。君には気の毒だが、二重丸はつかないが、出身局の局長の方へは手紙で知らせて置くから。」

私は「ハイッ」と云って頭を下げたが、目頭が熱くなった。修了式の日、私の名前は三番目に呼ばれた。一番は岩手県の赤平君、二番は秋田県の進藤君。嘉瀬に帰って十日ほどして通信局報を見たら、赤平、進藤、山中の順で名前が並んでいて二人には名前の上に二重丸がついてあった。

局のオドサ（郵便局長）は、「教官から手紙が来てあったよ、丸印はつかなくても優等生だって。よく頑張ったナ。」私は、その時も目に涙がこみあげてきた。こうして狭い嘉瀬の村から大都會で勉強させてもらい、いろいろ世の中を見てこれたのもオドサのお陰だと思つて、胸が熱くなったのだ。

私が仙通講へ行く一月ほど前に、金木郵便局の電信係に配属になったのに山形県出身の高橋君というのが居た。私が嘉瀬郵便局へ帰って来たのを知って、金木の局へ遊びに来いと何回も電話で誘いを受けた。彼は仙通講の先輩という意識と、山形県から津軽半島の知らない土地に赴任してきて話し相手が欲しかったのだ。

八月十三日局の勤務が終わってから自転車で金木局へ遊びに行った。高橋君は、電信の係りなので夜勤もあるのだ。仙台のこと講習所の中のこと、教官のこと、いろいろと話に花が咲き、時間の経つのも忘れるほどだったが、夕方になって雨模様となったので、別れを告げて帰宅した。その夜である。物凄い豪雨となった。夜中には半鐘が鳴り続けた。増水で河川のはらんを知らせる警鐘である。

父は警防団員（消防組の名称が変わって）なので、篠突く雨の中を合羽に身を包んで出て行った。

朝には雨も止んだが、その夜はまんじりともせず朝を迎えた。

父が帰ってきて言うには、「冷水の大堰がイガ（増水）って家の中き水上ってしまった。金木川だば営林署の丸太が流れてきて大変だじぢや……」

私は午後金木の方へ行ってみた。川境の間堰から金木寄りの方の田圃は、稲の上を泥水が通って行った跡がはっきり見える。田圃にはまだ

堪水している金木の菅原の田圃には県道（現在の国道三三九号）をはさんで直径三尺（約一米）もあるような大きな丸太があちこちに転がっていた。（現在の北大バチンコ付近）津軽鉄道の線路を越えて流れてきたものだが、線路は田面から三米以上も高くなっているのに、それを越えたのか、それとも五百米ほど距離のある金木川の鉄橋をくぐってここまで流れ着いたのか。大水の置土産を見ただけでもぞっとした。

この水害の様子を金木町史略年表には、次のように記録している。

『八月十三日金木町に集中豪雨、同夜金木町増水し、田町、小川町、川端町、三軒町一带は高台に避難したが夜中二五〇ミリの豪雨となり金木町はらんして営林署の貯木流失したが死傷者はなし』

この記録からは二五〇ミリという未曾有の雨量にもかかわらず大被害の姿が見えてこない。

昭和十八年八月十五日東奥日報朝刊には次のような記事が載っている。見出しは二段組で

津軽地方水害、冠水田九百五十餘町歩

十四日県警防課に報告されて来た各地の水害状況は現在までの處、青森市、金木・中里両町、嘉瀬、喜良市、蓬田、後潟、奥内の各村で家屋倒壊一棟、床上浸入八百六十一戸、床下浸水二千四百七十八戸、水田冠水は九百五十六町歩

冠水畑五百町歩、堤防欠壊五十八間、家流失二棟、木炭流失千三百五十俵の他奥内村の立木約二千町歩が畑地へ流失した。

損害は目下各署で調査中であるが、被害地帯の警察では直ちに警防団を出動させ萬全の措置を講じ遺憾なきを期している。

北郡の水害 北郡金木町地内の金木川が出水し同町並に嘉瀬、喜良市両村に被害があった。十四日午前九時までに判明せる被害次の通り

◇金木町 浸水家屋床上百七十二戸、床下五十二戸、倒壊一戸、馬一頭溺死

◇嘉瀬村 浸水床上十一戸、床下十戸、水田冠水約五十町歩

◇喜良市村 喜良市橋流失、木炭倉庫（木炭一千三百五十俵在庫）流失

また、八月十六日東奥日報朝刊に続報として

津軽地方の水害詳報

北郡 十三日夜金木地方を襲った豪雨が喜良市村山間部方面で崖崩れを来し金木川上流で一時巻止めたが、水勢を支へ切れずに決壊したためその勢ひで川岸に集積してゐた木材は勿論立木も押流されたものらしくその後の調査による被害（既報分を含む）は次の通り

◇金木町 △家屋浸水三百戸、倒壊一戸、破壊五十戸、△馬一頭、豚三頭溺死、△旭橋下流の假橋〇〇橋流失、蒔田川沈む

◇嘉瀬村 △家屋浸水二十五戸、△水田冠水五十町歩

◇喜良市村 △喜良市橋（木橋長四十米）流失、木炭倉庫（〇間に十二間木炭約二千四百俵在庫）流失、△家屋水田の被害目下不詳

金木町対策 金木町役場、金木署、町農会では協力して罹災者の

救助、冠水田の被害程度の調査並に復旧に乗り出し十四、十五両日は炊出しを給與してゐるが、十五日町会を開いて急速に対策を実行に移す予定である。

營林署関係 喜良市村二股澤にある營林署従業員育成署は出水のため寄宿舎を残して炊事場、食堂、客室等を含む約百坪の平家建並に倉庫二棟が流失した。

流失木材は金木營林署、県木社手持分を合して約一萬石に上り押流された森林鉄道も相当の延長に達しその他流失橋梁數ヶ所あり營林署関係の復旧費のみで十萬圓に達するものと見られ、十四日早朝から取あへず人夫五十名で被害の最中から雄々しく立上った。

と報道している。
また、金木郷土史略年表の昭和十九年の項に『前年の水害により、金木町川端町、三軒町、不動林の被災者は若松町に移転。四月』と記録があった。

その後、高橋君は、「もうこんな土地には居たくない。早く山形へ帰りたい。」とその夜の恐怖を語った。郵便局から、下宿している山形さん（当時、局長代理山形茂之進。現在の金木病院向いの風松堂造花本店）宅まで二百米ほどの距離を三十分以上の時間をかけて、濡れ鼠になってたどり着いたという。当時の金木郵便局は現在の津軽信用金庫金木支店の場所にあった。小さな洋館建ての近郷近在には見ることもない洒落た風な局舎であった。二階は電話交換室で、二階の窓からは、南方は朝日橋を渡って遠く嘉瀬の田圃や岩木山も眺望でき、すぐ眼の下には、ねりや旅館の庭、西側は道路を距ててカネ昌（高橋昌三郎家）の庭園が見られた。普段は歩いて三分もかからない道を、地面に手をつくような形で、ゴーゴーと濁流が渦を巻いて流れる朝日橋を渡ろうか、渡るまいかと、悩みながら、橋の欄干をつたわり、ぐらぐら揺らぐ橋の中ほどでは、このまま橋もろ共押し流されるのではないかと、生きた心地もなく無我夢

米英は侵略の魔手をわが皇土に伸ばしつつあります。私達女性はこの体で、この腕で宿敵米英必滅の武器を生産し、すめら御国を立派に護り通します。
と雄々しくも決意のほどを披瀝宣誓後、折からの寒気を衝いて街頭行進を行い、善知鳥神社に集合、皇国の必勝を祈り、生産挺身を誓った。

もう少し当時の新聞に目を当ててみよう。

『野草を食べる運動 一薬剤師会が指導』
県下の山野はもろんのこと、手近な家庭の軒下、空地等に食べられる野草がたくさんある。ただ我々に食べられる野草と牧草との区別がわからぬと、おいしい食べ方を知らぬだけで栄養価値も決して少なくはない。食糧不足殊に野菜不足の折、大いに野草を食べようと県薬剤師会では県衛生課指導のもとに五月早々から「野草を食べる運動」を起すことになった。

この運動方法として同会では青森市の薬店の店舗に食べられる野草を植木鉢に植えて飾り、これに「何々草」と立て札を立て食べ方や類似している毒草との見分け方、採取時期等、詳細な指導書をつけ運動の徹底を図ることになったが、一略一毎月隣組あるいは町内、部落会を単位に「野草を食べる会」を催し普及に努める。食用野菜は次の通り。

サントリ、ステリヒユ、オオバコ、ハコベ、アカザ、キリン草、ヤブカンゾウ、ソデコ、ペンペン草 (19・4・28)

『弘前公園も食糧増産のため畑地に』

由緒ある弘前鷹揚園を食糧増産の畑地にすることはいよいよ本格化し、十日午後から市長室において公園委員長及び国民学校長の連合協議会が

中で渡り切ったという。

高橋君は、この思い出したくもない土地から去ったのは、赴任してから一年も経っていなかった。それには、上司のいじめもあったようである。

その頃（昭和十八年）の世相はというと、大東亜戦争（大太平洋戦争）ではガダルカナル島の日本軍撤退（二月）、山本五十六連合艦隊司令長官、ソロモン上空で戦死（四月）、アッツ島守備隊玉碎（五月）、神宮外苑で学徒出陣壮行式（十月）、学童の縁故疎開促進を文部省発表（十二月）等、敗戦色が濃くなってきており、県内では、弘前観桜会の中止、県下銀行が合同、青森銀行を創立、青森県食糧増産隊（別名農兵隊）発足（北郡中隊長に大橋勇五郎氏）。昭和十九年に入ると、緊急国民勤労員方策要綱が制定（一月）、学童の疎開命令が出されるなど。また、県では供米の強権発動をはじめている。四月には燃料不足を補うための松根油の精油所が芦野公園に設けられた。

青森市内の女子中学校が女子挺身隊結成（二月）の記事を東奥日報紙から拾ってみると、見出しは二段組で、

青森市中等校 女子挺身隊を結成

今ぞ宿敵米英の莫大な生産に打ち勝たんものと陸奥女性は起った。全員白鉢巻き姿に制服、決戦服のいで立も凛々しく家庭からあるいは学舎から直ちに生産戦列に着かんとする県立青高女、東奥家政、山田家政、技芸学院の青森市内各女子中等学校の女子挺身隊の結成式は、十五日午後一時から市公会堂で挙行了た。

結成式では横山たきさん（県立青高女卒）が千五百余各の女子挺身隊員の愛国心を代表し、

『皇国女性として今こそ私達は生産増進に挺身致さねばなりません。敵

開かれ、東内門六十坪、南内門百坪、演舞場前五百坪、庭球場四百坪、亀甲門脇千坪、その他二千六百坪、合計三千九百二十坪を決定、直ちに現地調査を行ったが耕作の割当ては各国民学校と町内会の勤奉隊に委嘱する。

このため市当局は十日実地調査を行ったが最も拡大な地域を予想される旧本丸は旧藩主の館が設けられてあった関係から地下に敷石が張りつめられ、それにその一帯は砂礫を敷きつめてあるので急速に畑に仕立てることは時期を逸するとともに実際問題としては増産とならないので、本丸は手をつけず他の場所にこれに相当する地域を求めすることに決定した。 (19・4・12)

昭和十八年七月の新聞には、「弘前師団管内で軍関係の志願者九八七三名。」「県内各中等学校の子科練志望も急増九七％……」

『青年校 練成點呼一北郡で九月施行』「亜炭の焚き方―本県には無盡蔵」

など若者を軍へ駆り立てる記事や生活物資不足の報道が連日続いた。昭和十九年には繰り上げ徴兵検査が実施される。それより早く念願の少年航空兵の志願をしよう、という決意を固めた。

陸軍少年航空兵の試験場は、青森市の青森商工会議所の二階で行われた。まず体格検査があって、合格した者が翌日の学科試験を受けられるというところで、身体のあまり丈夫でない私は小雪の降る中を、なんとか明日の学科試験を受けたものだと思ふような気持で会場へ向った。

会場には何百人かの青少年が集っていて、青森連隊区司令部の係員から受付順に紐のついた番号札を渡され、それを首にかけて、十人が一グ

ループで、身長・体重・視力・聴力の検査、簡単な屈伸運動をやらされ、最後に軍医による内診を受け、それで終りである。午後三時には、合格者の番号が読み上げられ、翌日の学科試験に遅れないで出席するよう訓辞を受けてその日の体格検査は終りである。

心配していた体格検査を通過して、ほっとした。何人か肩を落としてガツカリした表情で帰る者もいる。これだけの人数で私の知った顔は一人も居なかった。その日の宿は、親戚の家（従兄の中谷幸一宅）へ泊ることになっていた。はじめての青森で不案内なため五時近くになってからようやく探し尋ねた。（今にしてみれば、最もわかりやすい場所、税務署通りの丸二証券の横の小路を入ったところ、現在の教育会館付近）

翌朝、中谷夫妻の励しの声を背に、学科試験の会場へ向った。すぐ近くの青森連隊区司令部の前を通り、新町通りから商工会議所へは三十分もかからず着いた。学科は何科目でどんな問題が出たのか記憶に残っていないが、体格検査の時のような心配もなく終った事だけは覚えている。

三月には合格通知あり、心に余裕が出来た。四月下旬だったろうか、徴兵適齢期で虚弱な体格の若者を集めて一週間の錬成会が開かれ、その対象となり、弘前市住吉町にあった長安倶楽部へ招集された。国家としては、少しでも多くの兵隊を集めるため、若者たちの身体を鍛えて置くのが目的のようである。この錬成会の助手を勤めていた弘前市和徳町の関井司郎君も同じ少年航空兵の奈良教育隊へ合格していたことを知った。体力増強のためどんな錬成をしたか、さっぱり忘れてしまったが、たった一つだけ忘れることのできなかつたのは、岩木川でみそぎをしたことである。岩木川まで約三キロほどの距離を駆け足で走らされ、河原で

たようだが、私の場合は、軍隊でなく学校だということに該当しなかつた。集った友人は未成年であるが、送別会には大人も居るので当然酒の宴となった。毛内君は勤務を終えて駆けつけたので、「遅れ三杯」と酒をすすめられ、忽ち酔いが回ったのであろう。助平な唄を盛んに歌っていたが、昼の疲れもあったのか、程なくその場に眠ってしまった。その夜は泊り、翌朝早く食事も摂らず、一番の汽車に乗るため飛び出して行った。

一日おいて、二十九日の午後嘉瀬駅から出発だ。親戚・友人それに隣近所の人達が十五、六人見送りに来てくれた。

昭和十六七年の頃は、現役による入営や招集による出征の見送りは盛大で、「祝入営〇〇〇〇君」「祝出征〇〇〇〇君」など名前を大書した幟を数本立て、見送り人も村長をはじめ親戚友人は勿論、町内の人々から、愛国婦人会等、津軽鉄道の小さな嘉瀬駅前には人の群れで立錐の余地もないほどで、集った人々は、誰からともなく「出征兵士を送る歌」の大合唱となる。

へ勝ってくるぞと勇ましく

誓って国を出たからは

手柄立てずに帰られよ

進軍ラッパ聞かたびに

険に浮かぶ、旗の波

見送り人の中から村長が激励の辞を述べ、出征者が決意表明とお礼のあいさつをして、村の有力者の発声で「万歳三唱」、やがて列車が入ってきてホームを埋め尽くしての万歳々の声、もう軍人になり切つてし

天突体操をし、ふんどし一本の真裸となり、雪解け水の身を切るような冷い流れの中へと、口口に何かを唱いながら河の中央へと進んで行くのである。唇は紫色になり、身体に感じるのは冷いというより痛いような感覚で、とにかく何か大声で叫んでなければ失神しそうであった。この錬成会での収穫は、戦後も交際の続いた数人の友人を得たことである。

この年、一ヶ月前の人たちと一緒に徴兵検査も受けた。結果は第一乙種合格。甲種合格は身体強健で品行方正な秀れた者たちの榮譽ある評価で平時には軍隊に入営出来るのは、この甲種をとった人達ばかりであったが、非常時のこの時代は、乙種でも合格という判目を押して軍隊へ引張って行くこととしていたのだ。（丙種不合格は身体に障害のある者、肺病等の病気の者等で、それ以外は皆入隊の資格を与えられた。）

徴兵検査で先輩からこんな話を聞いたことがある。ある青年が身体検査も終つて、徴兵官から口頭試問を受けた。

徴兵官「職はッ」

青年「熱つ飯サ、筋子ッ」

この青年は、「職は」と問われたのを「食」と聞き違っていたのだ。

当時の筋子は高級品で庶民の口には簡単に入らなかつたし、熱い飯に筋子をのせて食いたいのは、貧しい農民の願望の一つでもあったのだ。

十一月二十七日夜、親戚・友人を招き、私の送別会が開かれた。仙通講でたった一度顔を合せただけだったが、毛内喜代秋君も来てくれた。彼が仙台通信講習所の電信科を卒業してから五所川原郵便局に配属になり、私は何回か五所川原局の彼の所へ遊びに行つて親交を深めていた。

当時は酒も配給制であり、軍隊へ入営の際の送別会などには特配があつ

まつて列車のデッキに立ち拳手の礼をして見送り人に応えているうちに列車は動き出す。という風景が数限りなくあつたが、昭和十九年ごろになつたら、兵員の数がスパイに知られるからとかで、盛大な見送りはできなくなった。

私の場合も、万歳の声も軍歌の歌声もなく静かな見送りに、津鉄の汽車はガッタンコ、ガッタンコ発車した。

嘉瀬から青森に出るには、津軽鉄道から五所川原で五能線に乗り換えて更に川部で奥羽線に乗り継ぎ、時間にして約三時間もかかった。

青森駅前広場への集合時間は午後七時と定められている。晩秋の暮は早く午後五時にもなれば薄暗くなる。

青森から汽車に乗れば今度何時帰つて来れるかわからないという気持がそうさせたのか、見送りに付いて来てくれた友（それが誰であったか忘れてしまつていたが、後日金木局に居った尾野陸奥雄君であったことが分つた。）と、青森電話局に電話交換手の研修に来ていた金木局の乙女に面会に行ったのである。男子禁制の女人の館へ無謀にも夕暮の時刻に訪問したのだ。うら若い乙女たちを預かる管理人は、それは厳しい筈であったが、誰が交渉したのか、何がどうなったか今にしてみれば一切記憶に残っていないが、彼女が居る二階部屋に通されたようである。ようであるという事は、その部屋には何人居たのか、どんな話をしたのか、全然覚えていないが、二、三十分も居つたのか、二階から冷いコンクリートの階段を靴音を響かせながら降りてきたことは鮮明に蘇ってくる。

後日聞いた話だが、彼女も、唯泣けて泣けて、その夜は涙が止らなかつたとか、また、同室の人たちは、駅まで見送りに行つたらと言つてくれたが、唯泣けてくるだけで歩けなかつたという。

戦時中の暗く、異常な世相に若者たち（十六、十八歳ぐらい）の複雑な心理状態であったのであろう。また、女の管理人も、今戦場に駆り出される紅顔の美少年（？）に一抹の哀れさを感じたのかも知れない。

青森から夜汽車に乗って、日本海廻りで翌東京都に着き、更に関西本線へ乗り換え、奈良へ着いたのはお昼過ぎであった。

岐阜陸軍航空整備学校奈良教育隊に全国から集った人数は五百人、その日一日は「お客様待遇」だそう。青森連隊区司令部から引率して来た係官は、「明日からは学校の生徒というより軍隊だと思っけしつかりやれ。」と言って自分の任務を果たして帰って行った。

青森連隊区の管内は、青森・岩手・秋田・山形の四県で、約三十名ほどの今回の入校者を奈良教育隊まで連れてきたのである。長い夜汽車の中で、出身地を名乗り合うなどでわかったのは、武田村豊島の工藤忠信君、内湯村薄市の鎌田禮三君（いずれも現中里町）、五所川原町（現五所川原市）岩谷某、弘前市関井司郎君等であった。

奈良教育隊では既に内務班の割振りが決っていて、私は、第二中隊第三区隊第五班であった。第五班には鎌田禮三君も入り、私の右隣りは秋田県能代市から来た坂本三蔵君、左隣りは愛知県二ノ宮町の〇〇君、その隣りは朝鮮感鏡北道大山力君であった。工藤忠信君は第八班、関井司郎君は第一班、岩谷某は第一中隊だったが、病気になる約三ヶ月ほどで退学したと後日聞いた。

各内務班に入って少し休んだところで、制服が渡された。一装用（正装用）は入学式や儀式に着用するもの。ふだん着や作業衣、袴下（ズボ

聞くもの、見るもの、みな初めてで、その日は「お客様待遇」と言っても唯々疲れた。

翌朝「起床ッ」の声にびっくりして飛び起きた。起床喇叭など聞こえることもなくぐっすり眠りこけていたのだ。

さあ、今日から山中生徒は、陸軍少年航空兵なのだ。と気を張りつめて隣の戦友と力を合せて寝具を畳み、上靴を営内靴に替えて営舎前の広場に飛び出す。班長が外に立っていて「遅いぞッ」と激をとばす。朝の点呼である。全員整列したところで、番号をかけられ、班長が区隊長に報告し、区隊長が中隊長に報告する。（注）上靴（スリッパ）営内靴（短靴）編上靴は営外へ出た時着用

中隊長が退場した後で、週番区隊長からその日の日程が告げられ、週番班長の号令でラジオ体操を行う。内務班へ帰ってから掃除から食卓に食器を並べて、炊事担当を待つ。食事担当は五人一組で一日交代で行う。飯の入った二個の桶を（土方畚をかつぐように）丸太棒をとおして二人でかつぐのだ。汁とおかずの桶も同様、もう一人はお茶の入った大きな薬缶を持って、炊事棟から営舎まで約二百米の距離を急ぎ足で運んでくる。内務班に入って盛りつけ、それも三十名の班員に平等に盛付けしなければならぬ。最初のうちは飯や汁を残した者も居るが、一週間もすれば一日三合の飯が足りなくなり、隣の飯の盛りは自分より多いのではないかなど欲目が働いてくる。食事は十五分以上かけてゆっくりよく噛むことと言われても、早い者は五分もかけないで終ってしまふ。それでも全員が終らないうちは席を立てない。班長が箸を置いてみんなを見廻したところで、全員声を揃え「いただきましたッ」と言う。

八時から授業のある校舎へ入る。それもバラバラではなく、常に班毎の団体行動である。営舎内の行動は駆け足である。

ン下）から禪、軍手、軍足に至るまで身につける一切が官給物を支給され、私物は家へ送り返すためとめて置けとの指示だった。

朝の起床は午前六時、夜の消灯は午後九時、すべて喇叭で合図するということ、儀礼の喇叭、進軍、突撃喇叭等もこれから順次教えてゆく、と言って班長はみんなの緊張をやわらげるためか、喇叭の鳴り音について、軍隊ではこのように聞こえるという。

起床喇叭

〜起きろ 起きろ 皆起きろ
起きなければ 連隊長に叱られる

消灯喇叭

〜新兵さんは っらいだろ
寝てまた 泣くのかよう

「軍人勅諭（軍人に賜ひし勅諭）にはこのように書いてある。

- 一、軍人は忠節を尽くす本人とすへし
- 一、軍人は禮儀を正しくすへし
- 一、軍人は武勇を尚ふへし
- 一、軍人は信義を重んずへし
- 一、軍人は質素を旨とすへし

これからは、教育方針の基幹になる。上官に対しては殿をつけて呼ぶ、区隊長殿、班長殿という風に、それから生徒同士では、君とか僕とかは言わない。〇〇生徒という。上官室に入る時も〇〇生徒入ります。という風に言う。それから上官の命令は絶対である。軍人勅諭の中にも、下級の者は上官の命を承ること、実は直ちに朕が命を承る義なりと心得よ。とある。班長は、伍長の階級を持った人で現役上りの下士官であった。

入学式は、十月一日の午後二時から挙行され、胸に翼のマークのついた軍服を着用、三年前に決意した希いがやっと叶えられ感激も新たに大講堂に整列した。校長は中佐の襟章をつけた年輩の軍人で長い剣に黒のピカピカに光った長靴、副官や数人の将校を引き連れ入場して来た。

厳肅なセレモニーは一時間足らずで終わったように記憶している。唯覚えている事は、その日の夕食は赤飯が付き、魚も尾頭付きで大変な御馳走であったことである。

食事について一言書けば、何時も空腹感があったが、白米に押し麦が一割ほどで一日三合、魚肉は必ず一品はつき、牛乳は週一回日曜日の昼パン食の時につく。果物や甘い和菓子なども時々出る。在学中を通して大豆の入った飯とか、高粱の入った飯は二、三回よりなかった。食事については恵まれていたと言っけよと思う。

食事棟は兵営から離れたところにあつて、すぐ傍に浴場が五室ほどに区切られて建てあり、その付近は何時も蒸気が湧き立っていた。炊事係は招集兵らしく、四十歳過ぎぐらいの老兵が十数名働いていた。或る時、食事当番で空になった飯桶を返還に行った時に、一人の炊事係が「お前は東北か？」「ハイッ、青森県であります。」と言うと、「おっ、こっちへ来い。」とボイラーの蔭に私たち五人を連れて行って、お焦げの握り飯を喰べさせてくれた。この兵隊も東北出身なのであろう。入校して約三ヶ月後に、大講堂であったところが食堂に変身して、内務班での食事はしなくてよくなった。

三 昭和二十年

この奈良教育隊は、もともと一般兵舎として建設されたものであろう。